

マツの球果

ふたつの「世界」とひとつの夢

吉 田 章 宏

ふたつの「世界」

えた十人位のグループの方々に、くつろいだ雰囲気で、自由におし

や閊くなってお話するというつもりではなくて、親しい友人達も混

ゃべりするつもりで、書くことにしたいと思います。それでよろし

いでしょうか? じゃ、そんなことで・・・・

工業に押されて、ややさびれてきているといわれています。市は、「町として知られるところですが、現在では、日本やヨーロッパの鉄ーグ市というペンシルバニア州の町でした。ピッツバーグは鉄工のことになります。今度の滞米中のほとんどを過ごしたのはピッツバーでした。今回を合わせると四回目、約五年のアメリカ生活をした間でした。今回を合わせると四回目、約五年のアメリカ生活をした「中での渡米は、一九八〇年夏から今年の夏の終わりまでの約一年

の皆さんといっても、大会の時のように、数百人の方々の前で、やの皆さんといっても、大会の時のようと思います。そう、会員の皆さんにお話するつもりで書かせていただこうと思います。わざわざこんなことをお断りするのは、もしもっと広い読者を想定して書くなら、敵意ある人々のことも考慮して、慎重に書く必要が生じてくるからなのです。
で、この文章が広い読者の目に触れる可能性をたとえもっているとしても、私としては、ここでは、会員の皆さんにお話するつもりで書くことになりました。

『事実と創造』誌が、広い読者を持つ雑誌だとしても、本来、の文章を書くことになりました。

「アメリカでの研究報告」をするように、とのお誘いを受けてこ

街の様子などは、省略するとして……。
「スリー・リバー・スタジアム」が対岸に見えます。の中心街は、三つの河に囲まれて、そこから大リーグ野球のパイレの中心街は、三つの河に囲まれて、そこから大リーグ野球のパイレーができることもあって、空の交通の要衝ともなっています。市どジネスの町として栄えており、全国の主要な会社が、本社や支社

う大きな「現象学」研究者集団ということになり、これは、アメリ 哲学科のスタッフが十一名もいます。ですから、総勢二十五名とい の心理学科です。フルブライト上級研究員ということで、全く自由 高い丘の上にあるデュケイン大学(Duquesne Univ.) という大学 まあ、一流ホテルの様子を想像していただければ当たっているかと 汚れた様子からはほとんど想像もできない程です。日本でいえば、 スは、下町の様子とは全く異なり、静かで、芝生が美しく、落ち着 研究費も乏しく、教授達はコピー一枚とるのもポケットマネーでと カだけでなく、ヨーロッパも含めて、世界にも他に例がないそうで 十四人ほどですが、しかし、そのほかに、ほぼ同じ研究方向をとる は、アメリカでも唯一といってよい「現象学的心理学」でまとまっ に研究と勉強に時間を過ごさせていただきました。ここの心理学科 ん清潔に保たれていて、残念ながら、近頃の日本の大学の建物の薄 いた雰囲気に包まれています。大学の教室や研究室の建物はたいへ いう苦しい状態のようでした。もっとも、丘の上の大学のキャンパ いわゆる有名私立大学と比べると、経済的には大変な貧乏大学で、 す。大学はカトリック系の私立大学なので、大きな州立大学とか、 ている、たいへん特色のある学科なんです。スタッフは心理学科が 私が所属していたのは、その中心街から十分程歩いた所にある小

> 開いて下さいました。親しくなった教授達や大学院生達が三十人近 オ・ジオルジ教授が、お宅で私のために「さよならパーティー」を は、滞在中、個人的にもたいへんよく世話して下さっていたアメデ は、主として、フッサール、メルロ・ポンティ、シュッツに関心を シュッツ、それに、その流れをくむ人々にかかわるものでした。私 れ、忙しい、しかし、充実した日々でした。その主な内容は、フッ ス、哲学五コースに出席する結果になりました。かなり追いまくら を過ごそうと計画していたのですが、後半のゼミナールが私にとっ るのは半年だけにして、後の半年は独りで、自分の仕事や勉強に時 勉強させていただきました。はじめは、講義やゼミナールに出席す 々しい大学院生達に混って、大学院のゼミナールや講義に出席し、 きました。 く集まって下さり、心温まるたいへん楽しい一時を過ごすことがで 持って学びました。十ケ月を過ごしたデュケインを離れる数日前に サール、ハイデッガー、メルロ・ポンティ、サルトル、ディルタイ、 て特に興味深いものでしたので、惜しくなり、結局、心理学七コー つき、自分の研究を中心に生活を過ごしたわけです。二十歳台の若 単身赴いた私は、その大学のキャンパス内の学生寮の一室に住み

謝したい気持ちでいっぱいです。感じ、このことを可能にしてくださったすべての方々に、心から感感じ、このことを可能にしてくださったすべての方々に、心から感間の日々を過ごすことができたことを、本当にしあわせであったと私の研究のいまの段階で、デュケインで、こうして充実した一年

の友人の不幸にもあいました。生の逝去という悲しい報らせを受けねばなりませんでした。二、三生の逝去という悲しい報らせを受けねばなりませんでした。二、三藩と明先

せん。何としてでも生かしていかなくてはと、改めて思わずにはいられま何としてでも生かしていかなくてはと、改めて思わずにはいられまケインでの研究上の貴重な経験をこれからの研究を深めるために、ケインでの間守の間に起こったさまざまな事件をいま思うとき、デュー年の留守の間に起こったさまざまな事件をいま思うとき、デュ

日本に帰って来て感じたことは、私はこの一年の間、あまりにもアメリカでの生活、ことにデュケインの生活になじんでしまっていたらしい、ということでした。三ケ月近く経た今でもまだ、時折、日本での生活をぎごちなく感じることがある程です。それで思ったのですが、私は日本の世界からアメリカの世界へと住み移り、そこに「住みついていた」のだということ、そして、それだからこそ、いま帰国してきて、日本の世界からアメリカの世界へと住み移り、そこに「住みついていた」のだということ、そして、それだからこそ、いま帰国してきて、日本の世界からアメリカの世界へと住み移り、そこに「住みついていた」のだということ、そして、それだからこそ、いま帰国してきて、日本の世界がら、斎藤喜博先生を通じて、実践者の世界にとと、研究者の世界から、斎藤喜博先生を通じて、実践者の世界にしている自分に気づきました。それぞれの世界で、本気で一生懸命生きしい方々と出会いました。それぞれの世界で、本気で一生懸命生きしい方々と出会いました。それぞれの世界で、本気で一生懸命生きしい方々と出会いました。それぞれの世界で、本気で一生懸命生きしい方々と出会いました。

践者の世界の狭間で生きることを始めようとしています。いま、日本の世界に帰って来て、私は、再び、研究者の世界と実

らないのです。 では、何かたいへん明るい展望が開けてきているように思われてな受けていることも予感されます。でも、私は、研究の上では少なく要を離れていた私には、予想もつきません。さまざまな困難が待ち界を離れていた私には、予想もつきません。さまざまな困難が待ちと動がどういう方向にどう進んでいくか、激動の一年間、日本の世を動がどういう方向にどう進んでいくか、激動の一年間、日本の世を動がどういうです。

ませんが――を、少しお話してみたいと思います。「明るい展望」――いや、明るい「夢」といった方がよいかも知れまだ、日本の世界にしっかりとは根づいていない私が 今 い だ く

## 私の「夢」

なる、という「夢」です。それは、全国の教師の方々が、実践者であるとともに、研究者と私には、ひとつの「夢」があるんです。

呼ばれる人々がいる、というのが現在の姿です。 と考えられています。したがって、「実践者」という言葉は、教師と考えられています。そして、実践者である教師とは別に、 教育の研究を、――その中には、教育実践の研究、授業実践の研究 が含まれるわけですが――仕事としている、いわゆる「研究者」という言葉は、教師と表えられています。したがって、「実践者」という言葉は、教師と考えられています。

け。でも、私は、実践者と研究者のこの分業は、少くとも教育実践のでも、私は、実践者と研究者のこの分業は、少くとも教育実践の

れはそれで意味のあることであるかも知れません。しかし、実践研らと共同で研究することのできる「研究者」たちがいることは、そのと共同で研究することのできる「研究者」たちの仕事を援助したり、彼々生きている「実践者」たちによって担われるべきだ、ということ々生きている」いわゆる「研究者」によってではなく、実践を日に「住んでいる」いわゆる「研究者」によってではなく、実践を日

たのです。

なぜ、そう考えるのか?

チして、理由の説明に代えることにしたいと思います。るよりも、そのことから、どんな状態が目ざされているかかスケッで長い論文になってしまうでしょう。ここでは、その理由を展開するの理由を、事例を挙げながら十分に論ずるとすれば、それだけ

もいるわけです。 もいるわけです。 もいるわけです。 もいるわけです。 もいるわけです。 もいるわけです。 もいるわけです。 もいるわけです。 もいるわけです。 もいます。 もた充実感で満たす「すぐれた実践」をたえず創造している教師達もいます。 もかし、また中には、実践を通じて子ども達の可能性をひき出し、子ども達の日々の生活を生き生きとした充実感で満たす「すぐれた実践経験を重ねていきます。 もいるわけです。 もいるわけです。

では、教育(授業)実践の研究とは何でしょうか?

二つの考え方がありうると思います。

あくまで、より多くのより「すぐれた実践」のためであるというこまな「劣った」実践を研究することもありうるでしょうが、それはきな「劣った」実践を研究することを通じて、さらに多くの実践の本質や意味を明らかにし、そのことを通じて、さらに多くの実践がさらに多くのより「すぐれた実践」を創造することを促すことだ、という考え方です。もう一つは、実践の中でも、「すぐれた実践」に」研究して、こういう実践がありますよと「客観的に」示すことに」研究して、こういう実践がありますよと「客観的に」示すことに」の本語の表

とが大事な点なのです。

です。題は、では、そのような研究はいかにして可能になるかということ題は、では、そのような研究はいかにして可能になるかということ。さて、私は、右の二つの考えのうち、後者をとるわけですが、問

深めることによってだと、私は考えます。的教養を髙め、人間に対する理解を豊かにし、自己に対する洞察を的教養を髙め、人間に対する理解を豊かにし、自己に対する洞察を去れ、基本的には、実践者である教師達が、科学的教養や芸術

私は、むしろ、こんな風に考えるのです。 私は、むしろ、こんな風に考えるのです。 はどうももっているわけではないのではないか、そう考えるのです。 なってきてしまっているのです。そうした知識は、実践にとって邪なってきてしまっているのです。そうした知識は、実践にとって邪おいて積極的にどう生きるかさえ、私には疑問に感じられるようにおいるないとしても、それなくしては疑問に感じられるようにおいるのではありませるような、何か専門的な大量の知識のことをいうのではありませるような、何か専門的な大量の知識のことをいうのではありませるような、何か専門的な大量の知識のです。

ていきたい、という願いにあります。そして、もう一つの原点は、すぐれたものにしていきたい、子ども遠の教育をよりよく豊かにしのことを通して、自らの実践への洞察を深め、つぎの実践をさらにたことが何であったかを明らかにし、そしてその意味を解明し、そに実践研究」の原点は、実践者が、教育実践に臨んで自ら体験し「実践研究」の原点は、実践者が、教育実践に臨んで自ら体験し

るための必要からこそ生まれるべきなのだ、と。

践研究」とは、そうした実践の「創造」と「伝え合い」を可能にすていくこと、これが望まれている状態なの だ、と。そ し て、「実の体験を伝え合うことを通じて、教育実践の世界をさらに豊かにし

すぐれた実践を創造しつつある実践者達が、互いにその実践創治

ことに貢献したいという「願い」をいだくところにあります。そのことを通じて、さらに多くの子どもの教育をよりよくしていくたがら、実践創造への道を教えてほしいと望まれた時に、その求めちから、実践創造への道を教えてほしいと望まれた時に、その求めちから、つまり、自らの実践をよりよくしたいと欲している実践者たちさらに、すぐれた実践を創造している実践者が、多くの実践者たち

は、「子歌子」によってはますが、実践者の主体的な「願い」のまり、「実践研究」は、あくまで、第二には、志を同じくする実践をよりよくしていくため、そして、第二には、志を同じくする実践をよりよくしていくため、そして、第二には、志を同じくする実践がべきものだ、と考えるのです。それも、第一には、自らの実に発すべきものだ。とれる、実践者の主体的な「願い」

そして、「研究者」による「実践研究」にもし存在理由があるとそして、「研究者」による「実践者たちとそうした願いを共有し、すれば、それは、研究者が、実践者たちとそうした願いを共有し、

すると、問題は、つぎの二点にしぼられてきます。

実践者たちがそれを再創造できるような仕方で、伝えることができ第二に、実践者は、いかにしたら、自らの実践創造体験を、他の深く豊かな洞察を獲得することができるか?

だけでなく、実践における「喜び」も「悲しみ」も。ゆる体験が含まれ得ます。子どもを「見る」とか、「発問」だとかここでいう「自らの体験」という中には、教育実践に関わるあら

ところで、いかに伝えるべきかの問題は、同時に、「他の実践者」だり、だく、写路はおりる「著る」は「見しみ」も

うだということになります。 ものさまざまな社会的条件の妨げだけでなく、二つの理由がありそれは、実践者の世界の「文化」の問題でもあるのです。こうという問題、実践者の世界の「文化」の問題でもあるのです。こうという問題、実践者の世界の「文化」の問題でもあることに気づきます。そがいかに学びとるべきかという問題でもあることに気づきます。そがいかに学びとるべきかという問題でもあることに気づきます。そ

第二に、そうした実践者が、ある洞察を得たとしても、それを他の実践体験について未だ十分な洞察を獲得できないでいる。第一に、「すぐれた実践」を生み出している実践者たちも、自ら

ら、右に述べた意味でのすばらしい実践研究がいつも生まれるとは々の実践に出会ってきました。しかし、それらのすばらしい実践か私は、教授学研究の会で学ぶ中で、心からすばらしいと感じる数の実践者たちに伝えることができないでいる。

**敢えて極言すれば、こういうことになります。** では、なぜ、こういう亦態が続いているのでしょうか? 限らないということも、また、知りました。

それは、実践者たちに「自覚が足りない」からなのだ、と。実践

者たちが「不勉強」だからなのだ、と。

りません。いや、その感動をまざまざと思い起こすからこそ、こうした。そして、いまでも、そうしたことを決して忘れたわけではあるだけでなく、感動し涙ぐんでしまうことも数えきれぬほどありまないわけではありません。そして、そうした努力に、ただ頭がさがじむような、「背骨の曲がるような」思いの努力があることを知らいむまでもなく、私は、実践創造における実践者の方々の血のにいうまでもなく、私は、実践創造における実践者の方々の血のに

実践者は自覚が足りず、不勉強であると。いわなければならないと感ずるのです。

いう「自覚が足りない」ということなのです。ってくれるにちがいないと安閑として待っていてはいけないのだとればならないということ、いいかえれば「研究者」たちがいつかやへの洞察の獲得も、洞察の伝え合いも、結局は自分たちでやらなけ「自覚が足りない」ということばの意味は、実践者は、実践体験

そして、「不勉強である」とは、実践者たちが、そうした方向への努力を惜しんでいること、あるいは、そうした方向への努力を惜しんでいること、あるいは、そうした方向への努力をさめることの必要性をますます感じないではいられないのです。そのうした努力によって、どれほど実践者達のお互いの努力がいかに効果的に活かされうるかを思わずにはいられないのです。その意味で、実践者の方々の「不勉強」は、私としては、ただ、残念でならない思いがするのです。

神医学者たちがやはりそうです。ボスも、ビンスワンガーもそうでした。そして、今日の数多くの精ブロイトは実践者であり、そして理論家でした。ヤスパースも、フロイトは実践者であり、そして理論家でした。ヤスパースも、

人々であっても、もし、これから明確な目的意識と方向づけをもっ況は厳しく貧しい。しかし、日本の教師たちが、たとえ極く少数の況と、教師達が置かれている状況は余りにも違います。教師達の状たしかに、不公平なことに、医師達が置かれている社会経済的状

いないと、私は信ずるのです。 えるような、豊かで新鮮な人間理解を生み出すことができるにちがて努力を始めたら、精神医学者達がこれまでに生みだしたものを越 50

れが、私の「夢」です。 ボス……が現れてくる実践者の文化の世界が創り出されること、そ教育実践者の中から、フロイト、ヤスパース、ビンスワンガー、

「夢」を描いている、これからの実践者の皆さん。どうか、そんなます。でも、でも、……自覚をもって、勉強することを始めてみてます。でも、でも、……自覚をもって、勉強することを始めてみてます。でも、でも、……自覚をもって、勉強することを始めてみてます。でも、でも、……自覚をもって、勉強することを始めてみてます。でも、でも、……自覚をもって、勉強することを始めてみてます。でも、でも、……自覚をもって、勉強することを始めてみてます。でも、でも、……自覚をもって、勉強することと思います。でも、でも、でも、

むべき書物の名を、つぎに挙げておきます。る、教育実践に直接かかわる書物以外で、「夢」の実現のために読「教授学研究の会」の会員の皆さんが既によく知っていらっしゃでは、どこから始めたらいいでしょうか?

「夢」も描いてみては下さいませんか?

④ 神谷美恵子著『生きがいについて』みすず書房 (神谷美恵

背景に、「生きがい」について語った小さな本です。教育実践に生

これは、精神医学者であった神谷さんが、その広く豊かな教養を

そして、もしこの本に興味をもたれたなら、つぎに、せてくれる本として、まず、是非読んでいただきたい本なのです。の時代の人々でもあるわけですが――の生きがいについても考えさしてくれる本として、さらに、子ども達――子ども達は、これからきることの意味について、その生きがいについて、考えることを促

◎ ヴァン・デン・ベルク著。早坂泰次郎ほか訳『人間ひとりひ

◎ 同著・同訳『病床の心理学』現代社

できるようになっています。 でしょう。 なお、 国の巻末には、文 ども達の世界を扱うことになるでしょう。 なお、 国の巻末には、文 ども達の世界を扱うことになるでしょう。 なお、 国の巻末には、文 ども達の世界を扱うことになるでしょう。 なお、 国の巻末には、文 とも達の世界を扱うことになるでしょう。 なお、 国の巻末には、文 とも達の世界を扱うことになるでしょう。 なお、 国の巻末には、文 とも達の世界を扱うことになるでしょう。 なお、 国の巻末には、文 とも達の世界を扱うことになるでしょう。 なお、 国の巻末には、 さいたしい。 といってもよいかと思います。 でいる いってもよいかと思います。 でいる でしょう。 ならになる でしょう。 ならになる できるようになっています。 できるようになっています。

◎ アメデオ・ジオルジ著・早坂泰次郎ほか訳『現象学的心理学

とだともいえるでしょう。この本で述べられているような方向を、実践の世界で、実現するここの本で述べられているような方向を、実践の世界で、実現するこたいへんお世話になったジオルジ教授の著書です。私の「夢」は、 放ぶデュケイン大学で研究の上でも、個人的にも前述のように、私がデュケイン大学で研究の上でも、個人的にも

おかります。おかります。おかります。おおります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとります。おとりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりままする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。よりまする。

これは、邦訳も多く出ているポンティの著作のうち入門書として

みになってみて下さい。最適とされる論文集。『幼児の人間関係』『眼と精神』の二篇をお読

裂病の現象学』みすず書房 W・ブランケンブルク著・木村敏他訳『自明性の喪失――分

ぐれた本です。 研究とはどんな風に進めていくべきものかを知る一例として、す

私の「夢」なんです。 なの「夢」なんです。 なっな本を共通の背景にしながら授業について語り合う、それが、ような本を共通の背景にしながら授業について語り合う、それが、この本を読み終えられた時には、子どもの概念獲得への見方も一での、 E・フッサール著・長谷川宏訳『経験と判断』河出書房新社

● 荻野恒一著『現象学的精神病理学』医学書院

すぐれた概論書。

① 武田常夫著『真の授業者をめざして』国土社

ジョン・ホルト著・吉田章宏ほか訳『子ども達はどうつまず

(東京大学教授) なんです。 (東京大学教授) での研究の世界を思い描き続けているうちに、私の中で結ばれてき での研究の世界を思い描き続けているうちに、私の中で結ばれてき が究をしたよと、私に知らせて下さる日の来ることを、私は「夢」 を読んだことを契機にして、「研究」を始め、こんなにすばらしい を読んだことを契機にして、「研究」を始め、こんなにすばらしい を読んだことを契機にして、「研究」を始め、こんなにすばらしい の研究の世界を思い描き続けているうちに、私の中で結ばれてき での研究の世界を思い描き続けているうちに、私の中で結ばれてき での研究の世界を思い描き続けているうちに、私の中で結ばれてき での研究の世界に戸惑っている ひとつの「夢」なんです。